

資料7 説教 聖書における救いの道

「あなたがたは……信仰によって救われたのです」 (エペソ人への手紙2章8節)

序

1 人々がしばしば措いてきた宗教ほど、複雑に入り組んで、理解しがたいものは他にありません。このことは異教徒たち、そのうちの最も賢い者たちが信じてきた宗教について当てはまるだけでなく、ある意味でクリスチャンと呼ばれる人々の宗教にも当てはまります。いや実に、このことはキリスト教世界で偉大な名声を博した人々、その世界の「柱として重んじられる」(ガラ2章9節)人々の宗教にも当てはまります。しかし正真正銘のイエス・キリストの宗教は、何と理解しやすく、明白で単純なことでしょう。ただ私たちがそれを原初のかたちで理解し、すなわち神のことばに描かれているとおりに理解すれば、そうなるのです。それは、世界の賢い創造者・支配者である神が、理解の弱い、限られた能力をもった人間の現状にちょうど適合するように教えられています。このことは、キリスト教が目指す目的についても、その目的を達成するための手段についても、顕著です。一言で言えば、その目的は救いであり、それを達成する手段は信仰です。

2 これら二つの小さなことば、すなわち信仰と政いとが、聖書すべての実質を含み、聖書全体のいわば心髄を含むものであるということは、容易に認識されることです。その分だけ私たちは、より心してそれらに関するあらゆる誤解を避け、この二つに関する真の・正確な判断を形成するために努めるべきです。

ですから、以下の事柄を真剣に探求していきます。

- 一、 救いとは何か。
- 二、 私たちは信仰によって、いかにして救われるのか。
- 三、 私たちは信仰によって、いかにして救われるのか。

1 第一に、救いとは何でしょうか。これを尋ねます。エペソ人への手紙2章9節で語られている救いとは、しばしばこのことばによって理解される、いわゆる国へ行くこと・永遠の幸福を指すものではありません。それは、たましいが「アブラハムのふところ」(ルカ16章22節)と呼ばれるパラダイスに行くことを指しているものではありません。ここで言う救いは、死の向こう側、いわゆるあの世にある祝福ではありません。聖書のことばそのものが、疑いなく明らかにしています。「あなたがたは……救われたのです」。救いは遠くにあるものではなく、現在の事柄です。それは、無代価の神の憐れみによって、いま私たちが所有している祝福です。いや、この言葉を、「あなたがたは救われました」と訳しても、釈義的に問題はありません。ですから、ここで言われている救いは、神のみわざの全体に、すなわち、恵みが魂のうちに働く最初の兆から、それが栄光のうちに完成されるに至るまで、拡張して解釈できます。

2 もし私たちがこのことばを極限にまで引き延ばして解釈するなら、しばしば(生まれながらの良心)という名で、正確には(先行的恵み)と呼ばれるものを含めることができ

ます。先行的恵みは、父なる神の「引き寄せる」（ヨハ六制参）働きすべてを指します。それは神を求める欲求として現れ、もし私たちがそれに応じるなら、この欲求はますます増大します。それは、神の御子が世に生まれるすべての人を照らし、すべての人に「公義を行い、誠実を愛し、遜って神と歩む」（ミカ6章8節）ことを示すあらゆる光（ヨハ1章9節参）のことです。またそれは、神の霊がすべての人の子の中に、しばしば起こさせる罪の自覚を指します。もっとも、そうした自覚があっても、ほとんどの人はなるべく早くその自覚を押さえ込み、しばらくすれば忘れ去り、あるいはそうした自覚をかつて抱いていたことを少なくとも否定するでしょうが。

3.しかし今ここで、私たちはパウロが直接に扱っているこの救いだけに焦点を絞ります。この救いは、二つの大きな部分から成り立っています。それは、義認と聖化です。義認は、赦しと同義です。義認は私たちのすべての罪が赦されること、そして（必然的にそこに含まれるが）私たちが神に受け入れられることです。義認が私たちのために獲得された代価（通常、〈功績的根拠〉と呼ばれている）は、キリストの血と義です。（もう少しわかりやすく表現すれば）代価は、キリストが行われたすべてのことと、「そむいた人々のために、自分のいのちを死に明け渡し」（イザ53章は）てまで、私たちのために苦しめられたことです。義認による直接的な結果は、神の平安、「人のすべての考えにまさる神の平安」（ピリ4章7節）、そして「神の栄光を望んで大いに喜ぶ」（ロマ5章2節2）喜び、「ことばに尽くすことができない、栄えに満ちた喜び」（Iペテ一8）です。

4.そして私たちが義とされた、まさにその瞬間、聖化が始まります。その瞬間、私たちは「新しく生まれ」、「上から生まれ」、「御霊によって生まれる」（ヨハ3章3、6、7）のです。関係による変化だけでなく、実質的な変化です。私たちは神の力によって内的に刷新されます。「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれる」（ロマ五5）のを感じます。これによってすべての人、

特に神の子どもたちを愛する愛が生まれ、この世への愛、快樂・安楽・名誉・金銭への愛を追い出し、また高慢・怒り・我意、その他すべての悪しき気質を追い出します。二言で言えば、「地に属し、肉に属し、悪霊に属する」（ヤコ3章15節）思いを「キリストイエスにある思い」（ピリ二5）に変えるのです。

5.このような変化を体験した人が、あたかもすべての罪が消え去ってしまったかのように想像することはごく自然なことです。あたかもそれらが心の中から根絶やしにされ、存在していないかのようにです。「私は罪を感じない。それ故、罪は私のうちにはない」といとも簡単に結論してしまうのです。罪は活動しない。それ故、罪は存在しない。罪の動きがない。それ故、それは存在しない、と。

6.しかし大抵、しばらくすると彼らは真実に気がつきます。罪は停止していただけであって、滅ぼされたものではありません。誘惑が戻ってきて罪が息を吹き返すと、それが死んでいたのではなく、驚いて停止していたことが分かります。ここで彼らは、鍼明らかに対立する二つの原理が自分の中にあるのを感じます。「神に対して反抗する肉の思い」（ロ

マ8章7節)、神の恵みに反抗する生まれながらの性質です。内にはキリストを信じ神を愛する力が存在しているのを感じ、神の御霊が「私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証している」(ロマ8章16節) のを感じるのですが、ときには高慢な思いと我意とが、ときには怒りと不信仰が内にあることをも感じます。彼らはこれらの一つが、あるいはそれ以上が、心を支配することはないとしても、しばしば心の中で騒ぎ立つのが分かります。それらが「私をひどく押し倒そうとしたが、主は私を助けられた」(詩篇二八118篇3節) というような状況です。

7 1400年前にマカリウス(Macarius)は、神の子どもたちの現在の体験を実に正確に、次のように措いています。「未熟な(未経験な)者たちは、恵みが働くとき、自分たちは罪をもっていないと直ちに想像する。しかし思慮のある者であれば、神の恵みをもっている私たちでさえ再び悩まされることを否定できない。……というのは、こうした例を兄弟たちの中にしばしば兄いだす。彼らは、もう罪は内にないというほど神の恵みを体験するのではあるが、結局のところ、自分はそれから全く自由であると思ったときに、内に隠れていた罪が再び姿を現し、彼らを焼き尽くしてしまったのである。」(Homily, IX,4)

8 私たちが新しく生まれたときから、聖化の漸次的な働きが始まります。私たちは御霊の力によって、私たちの罪の性質である「からだの行いを殺す」(ロマ8章13節) ことができます。そして罪に対してますます死んでいくとき、私たちは神に対してますます生きるのです。「悪はどんな悪でも避け」(Iテサ5章22節)「良いわざに執心であり」(テト2章14節)、「機会ある度に、すべての人に対して善を行い」(ガラ6章10節) 主のすべての定めの中を責められるところなく歩み(ルカ1章6節参)、主を霊と真実をもって礼拝し、自分の十字架を負い、自分を主に導くことのない悦楽をすべて捨てていくとき、私たちは恵みから恵みに進んでいきます。

9 このようにして私たちは、全き聖化を、すべての罪・高慢な思い・我意・怒り・不信仰からの全き救いを期待します。あるいは、使徒の表現を使うなら、「完全を目指して進む」(ヘブ6章1節) のです。しかし、ここで言う「完全」とは何でしょうか。この言葉にはさまざまな意味がありますが、ここでは全き愛を指しています。それは罪を排除する愛です。それは心を満たし、たましいの全機能を支配する愛です。それは「いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことについて感謝する」(Iテサ五16~18参) 愛です。

二

それでは、私たちがそれによって救われる信仰とはどのようなものでしょうか。これを第二に考えます。

1一般的に信仰は、使徒が定義しているように、ελεγχος πραγματος βλεπομενων すな

わち、まだ見ていない事柄の保証、神より与えられた「保証と確信」です。それは見ることのできない事柄、すなわち視覚によっても他の外的知覚機能によっても神ご自身を、また神に関する事柄を超自然的に確信することができない事柄を保証するものです。信仰は神ご自身を、また、神に関する事柄を超自然的に確信することを意味します。それは、たましいに当てられた一種の霊的な光であり、またたましいに与えられた超自然的な視力、知覚です。したがって、しばしば聖書は、神が与えられる光として、あるいはそれを識別する力として信仰を語っています。

パウロは、「『光が、やみの中から輝き出よ』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです」（ⅠⅠコリ4章6節）と記しています。また他のところで彼は、私たちの「心の目がはっきり見えるようになって」（エペ1章16節）と表現しています。聖霊による、この二重の働きによって、すなわち私たちのたましいの目が開かれ、明るくされることによって、私たちは生まれながらの「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの」（Ⅰコリ2章9節）を見る私たちは神について目で見ることのできない世界を見ます。それは、私たちの回りを取り囲んでいる霊的な世界です。それは、生まれながらの感覚器官では、あたかも存在しないかのように、まったく見ることのできない世界です。そして私たちは、時の世界と永遠との間に下がっている幕を突き抜けて、永遠の世界を見ます。そのとき、雲と暗やみとはもはやその上を覆うことなく、すでにやがて啓示される栄光を見るのです。

2 この言葉をさらに特定な意味で理解するなら、信仰とは「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させました」（Ⅱコリ5章19節）ということだけでなく、キリストは「私を愛し私のためにご自身をお捨てになった」（ガラ2型ということをも神にあって確証し確信することです。この信仰によって（私たちがそれを信仰の本質と呼ぶか、特質と呼ぶかは別として）、私たちは「キリストを受け入れ」（コロ2章6節参）、すなわちすべての職務、預言者・祭司・王の職務にあってキリストを受け入れるのです。この働きによって、キリストは「私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとになれました」（Ⅰコリー1章30節）。

2 「しかし、これは確証の信仰（faith of assurance）なのか、それとも帰依の信仰（faith of adherence）なのか」。聖書には、そのような区別は出てきません。パウロは、「信仰は一つ、私たちの召しのもたらした望みは一つ」と述べ、私たちの信じる「主は一つ」であり、私たち「すべてのものの父なる神は一つ」（エペ4:4-6）であり、よってクリスチャンの救いの信仰は一つであると述べています。そしてこの信仰が、必然的に「キリストが私を愛し私のためにご自身をお捨てになった」という確証を含んでいることは確かです。（確証ということばは、保証と同義であると考えて良いでしょう。この二つを区別することは困難です。）なぜなら、真の生ける信仰をもって「信じる人は、自分の心の中にあかしを持っています」（Ⅰヨハ5章10節）。「御霊が、彼の霊とともに、彼が神の子どもであることをあかししてくださいませ」（ロマ8章16節参）。「彼が子であるゆえに、神は『ア

バ、父』と呼ぶ、御子の御霊を、彼の心に遣わし」(ガラ4章6節参)、彼が子である確証と子としての自信を彼の中に与えてくださいました。しかし、確証(assurance)は、その性質上、自信(confidence)に先立つということを見過ぎさないようにしましょう。というのは、人は自分が神の子どもであることを知る以前に、神の子どもとしての自信を持つことはできないからです。ですから、自信・信頼・依存・帰依、その他何と呼ぼうが、これは、ある人が想像するように信仰の第一の枝・所作ではなく、第二のものです。

4 救いということばを最高の意味で理解して、この信仰によって私たちは救われ、すなわち義とされ聖化されるのです。では私たちは、どのようにしてうか。これが第三の探求項目です。これは問題の主要な信仰によって義とされ聖化されるのでしょうか。これが第三の探求項目です。これは問題の主要なポイントであり、特別な重要性を帯びているので、この問題によ-際だった特別な扱いをほどこしても不適切ではありません。

三

1 第一に、私たちはどのようにして信仰によって義とされるのでしょうか。これをどのような意味で理解すればよいのでしょうか。答えは、信仰が義認の条件、唯一の条件だということです。信じる者以外は、だれも義とされません。信仰なしで義とされる人はいません。そしてこれが唯一の条件です。義とされるために、これだけで十分です。信じる人は、何を持っていようと持っていなかつと、だれでも義とされます。換言すれば、信じるまではだれも義とされることはなく、信じるときすべての人が義とされます。

2 「しかし、神は私たちにまた悔い改めることを命じていないか。しかも、『悔い改めにふさわしい実を結ぶ』(マタ三8)こと、たとえば、『悪事を働くのを止め、善をなす事を做う』(イザ1章16, 17節)ことを命じていないか。悔い改めも、その実を結ぶこともきわめて必要なことではないか。そのどちらかを意図的におろそかにするなら、義とされることはまった-期待できないのではないか。もしそうだとすれば、どうして信仰だけが義認の唯一の条件であると言えるのか。」

疑いもなく、神は悔い改めること、悔い改めにふさわしい実を結ぶことを命じておられます。ということは、もし私たちが意図的に怠るなら、義とされることを期待することは当然できません。したがって、両方ともある意味においては、義認に必要なことです。しかしそれらは、信仰と同じ意味において、また信仰と同じ程度において必要なのではあ-ません。というのは悔い改めの実は、それを結ぶだけの時間と機会があつて可能であるという条件付きに必要なのです。時間と機会がなければ、人はそれなしに義とされます。十字架にかけられた犯罪人がそうでした(もっとも最近の著者によっては彼が犯罪人ではな-、正直で尊敬すべき人物であると発見した人もいます)。しかし人間は信仰なしに義とされ得ません。それは不可能です。同様に、人が心底に悔い改め、それにふさわしい多くの実を結んでいたとしても、それらすべては何の役にも立ちません。信じるまでは義とされることはありません。しかし信じた瞬間、悔い改めにふさわしい実があつてもな-ても、また悔い改めの度合う。この二つを区別することは困難です。なぜなら、真の生ける信仰をもって

「信じる人は、自分の心の中にあかしを持っています」(Iヨハ5章10節)。「御霊が、彼の霊とともに、彼が神の子どもであることをあかししてくださいます」(ロマ8章16参)。「彼が子であるゆえに、神は『アバ、父』と呼ぶ、御子の御霊を、彼の心に遣わし」(ガラ4章6節参)、彼が子である確証と子としての自信を彼の中に与えてくださいました。しかし、確証(assurance)は、その性質上、自信(confidence)に先立つということを見過ぎさないようにしましょう。というのは、人は自分が神の子どもであることを知る以前に、神の子どもとしての自信を持つことはできないからです。ですから、自信・信頼・依存・帰依、その他何と呼ぼうが、これは、ある人が想像するように信仰の第一の枝・所作ではなく、第二のものです。

4救いということばを最高の意味で理解して、この信仰によって私たちは救われ、すなわち義とされ聖化されるのです。では私たちは、どのようにして信仰によって義とされ、聖化されるのでしょうか。これが第三の探求項目です。これは問題の主要なポイントであり、特別な重要性を帯びているので、この問題により際だった特別な扱いをほどこしても不適切ではありません。

三

1 第一に、私たちはどのようにして信仰によって義とされるのでしょうか。これをどのような意味で理解すればよいのでしょうか。答えは、信仰が義認の条件、唯一の条件だということです。信じる者以外は、だれも義とされません。信仰なくして義とされる人はいません。そしてこれが唯一の条件です。義とされるために、これだけで十分です。信じる人は、何を持ってしようと持っていなかつと、だれでも義とされます。換言すれば、信じるまではだれも義とされることはなく、信じる時すべての人が義とされます。

2 「しかし、神は私たちにまた悔い改めることを命じていないか。しかも、『悔い改めにふさわしい実を結ぶ』(マタ3章8節)こと、たとえば『悪事を働-のを止め、善をなす事を做う』(イザ1章16, 17節)ことを命じていないか。悔い改めも、その実を結ぶこともきわめて必要なことではないか。そのどちらかを意図的におろそかにするなら、義とされることはまった-期待できないのではないか。もしそうだとすれば、どうして信仰だけが義認の唯一の条件であると言えるのか。」

疑いもなく、神は悔い改めること、悔い改めにふさわしい実を結ぶことを命じておられます。ということは、もし私たちが意図的に怠るなら、義とされることを期待することは当然できません。したがって、両方ともある意味においては、義認に必要なことです。しかしそれらは、信仰と同じ意味において、また信仰と同じ程度において必要なのではあ-ません。というのは悔い改めの実は、それを結ぶだけの時間と機会があつて可能であるという条件付きで必要なのです。時間と機会がなければ、人はそれなしに義とされます。十字架にかけられた犯罪人がそうでした(もっとも最近の著者によっては、彼が犯罪人ではなく、正直で尊敬すべき人物であると発見した人もいます)。しかし人間は信仰なしに義とされ得ません。それは不可能です。同様に、人が心底に悔い改め、それにふさわしい多くの実を

結んでいたとしても、それらすべては何の役にも立ちません。信じるまでは義とされることはありません。しかし信じた瞬間、悔い改めにふさわしい実があってもな-ても、また悔い改めの度合いにかかわらず、義とされます。悔い改めとそれにふさわしい実とは、信仰と同じ意味で必要ではありません。それらは間接的に(remotely)信仰のために必要なのです。それに対して信仰は、義認のためにじかに(immediately)、直接的に(directly)必要です。義認のためにじかに、また近接に(proximately)必要である唯一の条件です。

2 「しかしあなたは、信仰によって聖化されると信じるのか。信仰によって義とされることをあなたが信じていることは分かった。しかしあなたは、私たちが行いによって聖化されると信じ、そのように教えていないのか。」

この二五年間、私がそのように信じ教えていると人々は正面切って熱心に断言してきました。しかし、私は常にその反対のことをあらゆる方法を用いて明言してきました。私たちは信仰によって義とされるだけでな-、信仰によって聖化されることを、私は私的にも公的にも常に証言してきました。

信仰によって義とされるのとまったく同じように、信仰によって聖化されます。義認と同じように、信仰が聖化のための条件、唯一の条件です。信仰は条件です。信じる人以外は、すなわち信仰がなければ、だれも聖化されません。それが唯一の条件です。これだけで聖化に十分です。そのほかのものを持っていても持っていな-ても、信じる人は聖化されます。換言すれば、だれでも信じる以前には聖化されず、信じたときに聖化されます。

4 「しかし義認に先立つ悔い改めだけでな-、義認の結果としての悔い改めがあるのではないか。

義とされたすべての人は置きわぎに熱心であるj(チ-二E)との義務を負うのではないか。これらの必要性の故に、もし人がこれらを怠れば、当然、全-聖化されること、すなわち『愛のうちに完全にされること』(ヨハ二5)を期待できないのではないか。のみならず彼は『私たちの主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長し』(Hペテ三1 8)、神が与えられた恵みを堅持し、受けた信仰にとどまり、主の好意の中にとどまることができないのではないか。あなた自身これらのことをすべて認めて、これまでそのような主張してきたではないか。だとすれば、信仰が聖化の唯一の条件であるというのはどういうことなのか。」

5 確かに私はこれらのことを神の真理とみなしていますし、これからもそう主張します。義認に先立つ悔い改めだけでな-、義認の結果としての悔い改めがあります。良きわぎに熱心であるというのは、義とされたすべての人に求められています。そしてこれらの必要性の故に、人がもし意図的にこれらを怠るなら、当然のことながら、いつか聖化されるなどと期待できません。それらを怠るとき、恵みに成長することも神の似姿に、キリスト・イエスの中にある心に近づくこともできません。すでに受けた恵みを保持することも、信仰にとどまり、神の好意の中にとどまることもできません。

以上のことから導き出す結論は何でしょうか。正しい意味での悔い改めも、あらゆる良きわぎの実践も-それには慈愛のわぎ(それは今や信仰から生じているので愛のわぎと呼ぶ

ことができる)だけでなく、敬度のわざも含まれている - 両方ともある意味で、聖化にとって必要であるということです。

6 私が「正しい意味での悔い改め」と述べたのはこれが義認の前の悔い改めと混同してはならないからです。義認の結果としての悔い改めは、それに先立つ悔い改めと明確に異なるものです。これには罪責や、罪の責め苦、また神の怒-の自覚は伴いません。義とされた後は、悔い改めても、そこには神の好意を疑う思いや、「刑罰の恐れ」(Iヨハ4:18)は伴いません。それは正確には、未だに心に残存する罪について、(英国国教会の表現を使えば)「新し-生まれた者のうちにも未だに存続している肉の思い」(『三九宗教箇条』IX, "Of Original or Birth Sin" (φρονημα σαρκος))について、聖霊が働かれた自覚です。もともと残存する罪は、もはや支配することはなく、主権はありません。それは、私たちのうちにある悪への傾向性、背信の傾向のある心、「御霊に逆らう肉の思い」(ガラ5:17)が未だに存在していることの自覚です。もし私たちが絶えず目を覚まして祈っていなければ、時にはそこから高慢な思いや怒-、世に対する愛・安楽への愛・名誉への愛・神よ-も快樂を愛する愛が生じることがあります。義認の後の悔い改めは、私たちの心に未だに、我意・無神論・偶像崇拜、わけても不信仰に対する傾向性があることを自覚するものです。この不信仰は、無数の方法で、また無数に形を変えて、私たちを変えて、私たちを「生ける神から引き離す」(ヘブル3:12)ようにします。

7 私たちの心の中に罪が残っているという自覚とともに、私たちの生活の中にも罪が残っていて、私たちの言葉と行いすべてにまわりついているという自覚があります。自分の言行の最善のものにさえ、その言行の精神・事柄・あ-方のなかに悪が混在していることを意識します。神がもし「不義に目を留められるなら」(詩篇130:3)、それは神の義の裁きに耐えられるものではありません。私たちがまったく想像もしなかったところに、ごう慢な思いや我意、不信仰や偶像崇拜のかけらを見いだします。結果として、かつて私たちの最悪の罪を恥じていた以上に、今は最善の努力を恥じます。

ですから、私たちの言行は、何か功績を得るようなものでは決してないと感じざるを得ません。神の義に照らされたとき、決してそれに耐えるようなものではないのです。これらのことのために、もし契約の血がなかったとしたら、私たちは神の御前に有罪です。

8心に残る罪の自覚、言行すべてにまわりつく罪の自覚、またそれらの故に、煩いの血を常にふりかけてもらわなければ、自分が罪深い存在であるという自覚に加えて、経験により、私たちは、この悔い改めにはもう一つのことが含まれていることを知っています。それは、自らの無力さの自覚です。もし、無代価で全能であり、私たちに先行する恵みがなければ、そしてその恵みがそのとき以来私たちに伴っていなければ、この良き思いさえも考えることはできず、一つの良き願いを形作ることもできず、ましてや一つの正しき言葉を話すことも、一つの良き行いを行うこともできないということです。

9 「しかしあなたが聖化のために行うことが必要だと主張している良きわざは、どのようなものか。」第音、それはすべての敬度のわざ(works of piety)です。公の祈り、家族での

祈り、個人の隠れたところでの祈り、主の聖餐にあずかること、みことばを聞き、読み、黙想すること、また健康が許す限り断食し禁欲することなどです。

10 第二に、それはすべての慈愛のわざ(*works of mercy*)です。それは周りの人の身体とたましいに関わるわざです。たとえば、飢えている人に食を与え、裸の人を着せ、旅人をもてなし、牢獄にいる人や病人やさまざまな困難にいる人を見舞うことなのです。またそれは、無知な人を教え、愚かな罪人の目を覚まし、なまぬるい人に活気を与え、ぐらついている人を確かにし、弱気な人を励まし、誘惑にあっている人を力づけ、どんな方法であってもたましいを死から救い出すために努めることです。これが悔い改めであ-、またこれらの事柄が、全き聖化のために必要な悔い改めにふさわしい実です。全き救いを待ち望むために、神の子どもたちがこの道を歩むようにと神が備えてくださいました。

11 「信仰者の中に罪はない。すべての罪は、義とされた瞬間へその根も枝もすべて破壊されてしまった」という一見無害に見える意見が非常に災いをなすものであるということが、これで明らかになったことでしょう。生活の中にも心の中にも罪はないと信じる人は、悔い改める余地はなく結果的に、愛において完全にされる余地もありません。愛において完全にされるためには、この悔い改めが必須なのです。

12 同様に、このように全き救いを待ち望むことはきわめて安全であるということが、ここで明らかになるでしょう。たとえ私たちの考えが誤っていたとしても、たとえそのような恵みに到達した人がかつていなかったとしても、またあ-得なかったと聯ても、失うものは何もありません。それどころか、恵みを期待することは、私たちは神が与えられたあらゆるタラントを用いることを促し、それらをさらに増やし、やがて主が来られるとき、主がご自分のものを利息と共に受け取られます(マタ 25 章 27 節)

13 話を元に戻します。この悔い改めとそれにふさわしい実は、全き救いのために必要なのですが、信仰と同じ意味において、また信仰と同じ程度において必要なものではありません。それが同じ程度においてではないというのは'ふさわしい実は、その時間と機会が許される時という条件が付いて必要なのです。それでなければ、人はそれらなしに聖化されることもあります。しかし信仰がなければ、聖化されません。同様に人がこの悔い改めをどれほど探-感じていたとしても、また良きわざをどれほど積んでいたとしても'信じるまでは聖化されません。しかし信じた瞬間、そうした実があろうとなかろうと悔い改めの程度に関わらず聖化されます。それが同じ意味においてではないというのは'悔い改めとそれにふさわしい実とは間接的に必要なのです。それは信仰にとどまるために、また信仰を増すために必要です。それに対して信仰はじかに、直接的に聖化のために必要です。ですから信仰だけが聖化のためにじかに近接に必要だということになります。

14 「ではそれによって私たちが聖化され、罪から救われ、愛に全うされるという信仰は、どのようなものなのか。」

それは第一に、神が聖書においてそれを約束されたという、神からの保証と確信です。これに徹底的に満足するまで一歩も前に進むことはできません。理性のある人であれば、以

下の昔の神の約束のことばがあれば、他に何もなくてもこの約束が真実であると満足するでしょう。「あなたの神、主は、あなたの心とあなたの子孫の心を包む包皮を切-捨て、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたを生きるようにされる」(申命30章6節)。このみことばは、愛に全うされている状態、すなわちすべての罪から救われている状態を実に明確に表現しています。心全体が愛によって全うされている限-、心中に罪が入-込むすき間はないからです。

15 第二にこの信仰は約束されたことを神は成し遂げることができるという神からの保証と確信です。汚れたものの中からきよいものを生み出すこと、すべての罪から心を清め、聖潔で満たすことは、「人にはできないこと」とであると認め、しかし「神にはできないことはひとつもない」(マタ19章26節)ことを理解した上で、この場合、何の困難も引き起こさないと信じることです。確かに、全能者の力以下の力でそのようなことが可能であると想像する人はだれもいません。しかし、神が声を発せられると、それはなされます。神は「光よ。あれ」と言われ、「すると光ができた」(創世1章3節)のです。

16 第三にこの信仰は、神がそれを今なしてくださる力があ-、それをなす意志があるという、神からの保証と確信です。今ではないということがあるのでしょうか。神にとっては千年もひとときと同じではないですか。御心を成し遂げられるために、これ以上の時間を要するはずはありません。そして今ある以上の価値や資格をご自身が尊んでおられる人の中に形成されなければ、御心を成し遂げることができないとか、それを待っているというようなことはあり得ないことです。したがって、私たちはいつでも大胆に「今が救いの日です」(Ⅱコリ6章2節)とすることができます。「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはなりません」(へブ4章7節)。「何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください」(マタ22章4節)

17 神は私たちを今きよめることが可能であり、そうしようと願っておられるという確信に加え、もう一つ、神はそれを現実にされる、という神からの保証と確信が必要です。その瞬間きよめられます。そのとき神はたましいの奥底に向かって「あなたがたの信仰のとおりになれ」(マタ9章29節)と言われます。そのとき、たましいはあらゆる罪の染みから純化され、「すべての不義からきよめられます」(Ⅰヨハ1章9節)。そのとき信仰者は、「もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わ-を保ち御子イエス・キリストの血がすべての罪から私たちをきよめます」(Ⅰヨハ1章7節)という厳粛なことばの真義を体験します。

18 「しかし神はこの偉大な御業を、たましいの中に漸進的に働かれるのかそれとも瞬時的に働かれるのか。」おそら-、ある人には漸進的に働かれるでしょう。わたしが言うのは、そのような人々は罪が存在しな-なる特定の瞬間に注意を払っていないという意味です。しかしもしそれが神の御心なら、瞬時になされることの方が、主が瞬時に、またた-間に「口の息によって」(ヨブ15章30節)

罪を破壊される方が、はるかに願わしいことです。そして主は、概してそのようにされま

す。これは明白な事実であって、偏見のない人ならだれでも満足していただくに十分な証拠があります。それ故あなたは毎瞬それを求めなさい。それを既述された方法で、すなわち「キリスト・イエスにあって新しく造られた」(エペ11章10節参)人に備えられた良きわざを行いつつ、それを求めなさい。そのとき危険は何もありません。そのような方法で期待するなら、これ以上良くならなかつたとしても、悪くなるはずは絶対にありません。というのは、あなたの希望が実現しなかつたからといって何も失うことはないからです。しかし、あなたの期待は裏切られることはありません。それは来ます。遅れることはありません。ですから、毎日、毎時間、毎瞬、求めなさい。今、この瞬間でもいいのです。もしあなたが全き救いが信仰によると信じるなら、それをいま求めて何の問題があるというのです。そして、このしるしによって、あなたがそれを信仰によって求めているのか、行いによって求めているのかが明らかにされます。もし行いによるなら、きよめられる前に、まず何かをしようと思うでしょう。「私はこのようにならなければ、あるいはこれを行わなければ」と考えます。だとすれば、今に至るまで、あなたは行いによって求めているのです。もし信仰によって求めているなら、ありのまま期待します。そしてあ-のままで求めるなら、今期待できます。信仰によって期待しありのままの自分で期待し、今それを期待する、という三つの点は不可分の関係にあることを注意探-見て取るべきです。そのうちのひとつを否定することは、全部を否定することです。その一つを認めるなら、全部認めることとなります。あなたは、私たちが信仰によってきよめられることを信じますか。でしたら、自分の原則に忠実でありなさい。今のあるがままの自分で、それ以上良-も悪-もない自分で、この祝福を求めなさい。代価を支払うことができない、ただ「キリストIが死んで-くださった」(ロマ5章6節参)こと以外には何も訴えの根拠を持たない、あわれな罪人として求めなさい。そしてあるがままの自分で求めるなら、今それを期待しなさい。引き延ばす理由はありません。なぜそうしなければならぬのですか。キリストは準備ができておられます。そしてこの方こそあなたに必要なすべてのものです。主は待つておられます。戸口におられます。たましいを注ぎだして、叫びなさい。

どうぞお入りください 天来の客人である御方

ここから去ることをしないで-ださい

私と共に食卓に着き この祝宴を

永遠の愛として-ださい

(チャールズ・ウェスレ-、Hymn son God' sEverlasting Love, PoeticalWorks,

